



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



重森健介氏(高知県立高知国際中学校)

中学2年の学年主任と教科は中1・中3の理科(MYP)を担当しているほか、
中学校の総務部長も担当。中高理科の専修免許を保有し、教員歴11年目、うちIB歴は約8年。

「自ら学び考えを深めていく力を信じて、問いを投げかけていくことで課題解決できる人材を育てる」

教師が教えなくても、意外と生徒はなんでもできる

初任は高知県内の市町村立の学校で3年間勤務、その後、東京学芸大学附属国際中等教育学校(ISS)に研修で2年間派遣され、高知に戻って本校をつくる準備に携わり、現在開校して5年目となりました。IBのことはISSに行くというときに初めて知ったのですが、実際にIBに触れての第一印象は、「生徒って、意外になんでもできるんだな」でした。前任校では、板書して上手に説明して「ここが大切です」と生徒に伝えることが大事と考えていましたが、ISSでは、生徒に課題を投げかけ、生徒は自分で知識を取ってきて自分で考えを深めていけるというところを見て、ああ、できるんだな、と。教科を問わず他の先生の授業を見せてもらい、こういうのをIBというのだなと思ったのを覚えています。

理科では3つの「重要概念」があり、そのうちの1つに「システム」があるのですが、まずは世の中のいろいろなシステムをイメージさせてあげて、「これから『システム』ということを考えるよ。その考えにいきつくために理科の学習を進めていって、最終的には『システム』というものを考えるんだよ」というのを生徒には伝えています。

例えば今、中学1年生で人体のことをやっているのですが、「呼吸」「消化」「吸収」「排出」「循環」というのはそれぞれが単独した「システム」であるけれども、全部を共通した「システム」と捉えて考える必要があります。そこで、それらの共通項をまとめて、この具体の5つのシステムから、探究テーマ「システムは均衡を保つ」について考えてみよう、という問いを投げかけたりします。

自分で知識を習得し、自分で考える状況をつくる

日本の教育は、各教科内で学習が完結してしまいがちで

すが、それを探究テーマや概念で理解しようとする、他の教科の内容を踏まえて教科横断的に考えていくことが自然と身についていくと思います。例えば、植物の学習であれば、植物がどう出現して、どう発展してきたかということだけでなく、世の中で稲作が始まったとか、植物が絵具として使われて美術界がこのように発展してきたなど、社会科や美術科の要素もあるのだという気づきが生徒の中で生まれていました。

私が授業の中で意識しているのは、「生徒が自分で知識を持ってこられる状況をつくること」、そして「自分達で考えを深められる状況をつくること」です。教師が説明してしまうと、そこで生徒たちの思考がストップしてしまうので、「この問題を解決するにはこの知識が必要」というのを自分で判断して取ってきてもらいます。また、インターネットで取ってきた知識だけでは表面的で、理解が進んでいないと思うので、自分なりに表現できたり、知識を組み合わせで深く理解できたりするような状況を作れる活動を入れるようにしています。

当初は、生徒が正しく知識を取得して理解できていくかという不安がありましたが、自分達で情報を取ってこられるようになるのは大切なことですし、ユニットごとに小テストをすることで知識の修正はできると思ったので、今はその不安は解消されつつあります。

中1のうちは自分が行き詰まったり分からなかったりすると、「先生、どうなんですか」と聞いてきますが、基本的には答えず、自分で調べたり友達に聞いたりするよう促します。そうすると、中3になる頃には教師に聞く前に自分で調べ、他の人に相談してみるようになります。そして、大部分の理解は進んだが、どうしても理解できない部分があるという場合に教師が説明するというようにしています。

最近は中学の教科書では満足できない生徒が増えてきていますね。というのは、単に覚えるだけでなく、「何でこう

なるの？」という問いに対して考えるには、内容をしっかり理解する必要があるわけですが、中学の教科書は説明が簡略化してあるからです。その場合は、高校の教科書を渡します。理科に関してはキーワードを理解できれば高校の内容も理解できると思いますし、理解しようという積極性がIB生にはあるのです。

IBでの学びを活かして、 世の中の課題を一つでも多く解決して欲しい

IBで学んだ子ども達には、将来、世の中の課題を一つでも多く解決してほしいと思っています。IBでは問題を解決するのに必要な知識を自分で取ってきて、考えを深めていくので、この子達が中学生、高校生、大学生となっていくと、できる幅がどんどん広がっていき、社会人になればさらにいろんなことが可能になってくると思うので、今解決できていない様々な問題を解決して、より良い世の中にしていってほしいと思います。

本校は、起業したいと思う生徒が他の学校より多いんじゃないかなという印象があります。「今はこれが不便だから、これを改善したい」というのがあって、起業しているところと連携していやっていきたいという子もいますし、海外に目を向けている生徒も多くいます。あるいは、「今こういう状態だから、自分が東京とか海外に行って、こういうことができるようになって、おばあちゃんの家を近くを発展させたい」のように、最終的には高知に戻ってきて何かしたいという生徒も一定数います。

いずれにせよ、中学校の段階からやりたいことや目標を持っている生徒が多いですね。IBの授業では、他教科の内容も含めていろいろ学習する中で、このような仕事があるとか、こういうことに活かせるとか、そのような理解ができる場面が多いと思うので、その中で目標を見つけやすいのではないかと思います。

授業大会のような特別授業より、普段の授業の視察によって、 IB教育について知ってもらいたい

今IBに関心を持たれている先生には、いろんなアイデアや熱意をもっている方もたくさんいらっしゃると思うので、その先生方にはまずIB校を視察してもらい、自分の教科の授業を見てもらうと良いと思います。そうすると、「こういうアプローチのしかたがあったのか」とか、「ここまで生徒に任せていいんだ」といった、私が初めてISSに行ったときのような気づきがあると思います。そうなればIB校で働くことへの意欲にもっとエンジンがかかってくるかと思っています。

授業大会や研究大会など、各学校で開かれるじゃないで

すか。個人的には、それだけを見るのはいまいちだなと思っています。そのような授業は、その日のために特別に先生が作り込んだものだと思うからです。私が困ったのは、IBの授業をしていくとなったとき、普段の授業の中で、そこに向かってどう展開しているのかはわからない、という部分が大きかったです。時間的な余裕があるかという問題もありますが、可能であれば、1週間この授業を見させてもらうとなれば、普段の授業の間の様子や生徒の様子が見られるので、参考になるのではないかなと思います。

評価や授業構想は大変。それでも生徒が自分達で学習できるようにしていくことを考えればIBには大きな価値がある

本校は適性検査などを受けて入学してくるのですが、それが公立校でIBを導入すると、学力の差も大きかったり、子どものバックグラウンドもいろいろあったりするので、その点を考慮しながらIBを進めていく必要があるのではないかと思います。今はだいぶ改善されてきましたが、当初はそこまで考えが及ばない部分もあったので、そこが反省点と考えています。

IB教育を行っていく中での教師の負担感として授業準備や授業研究の点で言えば、総括課題や問いを考えるのにもやはり時間がかかることです。たくさん資料を探して、読んで、考えて、アイデアを出すというのが大変ですね。ただ、かつての授業でどこをどう説明するか、どう伝えるかを考えるのが大変でしたが、悩みの質としては、今のほうがいいかなと思いますね。どう説明するかという悩みは、その学校に合った内容に毎回マイナーチェンジをしていかなければなりませんが、アイデアや授業構想というのは、IB校でなくてもできること、どの学校にいてもできることだと思うので。ベースができていたら、問いを考えたりするほうが生徒たちも取りくんでくれやすいです。

また、評価は大変ですね。単純に記号を丸付けするだけでなく、レポートを読むとか、生徒が1〜2か月かけて作ってきたものを1人1人評価するので、時間はかかります。それでも、生徒が自分達で学習できるようになっていくというのは大きなメリットだと思います。そのような生徒の変容をみると、IB教育を導入したほうが良いと思います。

(2022年度取材記事)

